

# 「千円‘から’お預かりします」の理論言語学的考察

松 本 純 一

## 要 旨

近年日本語の話し言葉でよく聞かれる「～円からお預かりします」という言い回しに関して、その表現の成立と存在意義について、生成文法を始めとする理論言語学及び普遍文法の観点から考察する。結論として、この表現は本来助詞が存在しなくてよい部分に、丁寧さを高めるために日本語におけるデフォルトな後置詞「から」が挿入されたものであるという説明を提案する。この結論を支持する根拠として、現代日本語文法論における構造格と内在格との区別・日本語の後置詞「から」が持つ独自の性質・他言語における格体系・英語におけるデフォルトな前置詞などの言語現象を取り上げる。

この論文では、近年日本語でよく聞かれるようになった「～円からお預かりします」という表現について、その表現の是非に関する社会的議論などはさておき、このような表現が生まれるにいたった心理言語学的背景を考慮しつつ、理論言語学あるいは文法理論の立場から、この表現の成立についてある種の解説を試みようとするものである。

## I. 言語事実

近年、日常の生活の中でよく耳にするようになり、少なくとも日本語や言語になんらかの形で関心の深い人々の間ではしばしば話題になる表現として、「～円からお預かりします」という言い方がある。典型的な用例としては、次の(1)のようなものが挙げられよう。

(1) 千円からお預かりします。

[900円の買物をして、こちらが千円を払った際の応対]

純粋に論理的に考えるならば、この表現はややおかしい言い方である。おそらく、だれしものが考えつくように、この表現は、たとえば次の(2a)や(2b)のような内容が省略され、圧縮されて出来上がったものだということができよう。

(2) a. 千円の中から代金をひいて、残りのお釣りをお出しいたします。

b. 千円をお預かりしましたので、そこから代金を引いてお釣りをお出しいたします。

しかしながら、さらにおかしなことに、最近ではこの表現がいわば一人歩きを始めており、(3)のような言い方を耳にすることも多くなってきた。

(3) 千円ちょうどからお預かりいたします。

[千円の買物をして、千円ちょうどを払った際の応対]

この(3)になってくると、だれが聞いても明らかに理屈に合わない表現ということになってくる。なぜなら、この場合は上記(2)に類するような復元をすることはいっさいできなくなるわけだからである。つまり、ここに至ってこの「～円から」という表現は、単なる丁寧語的表現として用いられているのだとしか言いようがなくなってくる。

このような表現がいつごろどのようにして生まれ、どの程度一般に広まりつつあるのか、またこの表現に対してどのような社会的評価が下されているか、といったいわゆる社会言語学の問題も、非常に興味深い研究課題である。しかし本論はこの表現のそのような側面についての考察を目的とするものではないので、本節で研究の前提として以下に簡単に述べておく言語事実は、厳密な統計調査などに基づいたものではなく、筆者の日常生活における体験から、暫定的な観察結果として断定したものであるにすぎないことを、ここにお断わりしておく。

この表現は、明らかに話し言葉において多用されるようになった表現であり、今のところ、言語学の研究論文や日本語に関する評論などを除けば、書き言葉ではほとんど見かけることはない。また、この表現を聞いて思い浮べる典型的な場面は、コンビニエンスストアやファミリーレストランのレジにおいて、比較的若い年代のアルバイト店員の口から発せられている状況であり、この表現は若い世代から始まった口語表現の一種であると断定してよさそうである。現在のところ、高級なレストランや大型デパートなどで、熟練した店員の口からこの表現が聞かれることはあまり多くはないようであるが、これらの日常的な商業的場面において、着実に広まりつつあるように思われる。

このように論理的におかしな表現が流布しつつあることについては、少なくとも私たち文科系の研究者の間ではかねてよりしばしば話題になることも多かった。当然、世間一般でもこの表現はあまり好ましくはないものとして認識されているものと思われる。しかし、私の知る範囲では、さまざまな種類の敬語の乱れや、語法の変化（たとえば、いわゆる「ら抜き言葉」など）、発音の揺れ（たとえば、鼻濁音の消失など）に関してあれほど大きな反応を示してきた、マスコミやいわゆる有識者の人々が、この表現については意外に口をつぐんでいるようにも感じられる。またコンビニエンスストアの店長を勤める知人など数人に確認してみたところ、現在のところこれらの職場としては、無論「～円からお預かりします」という言い回しを奨励してもいないが、特にこの言い方をしないようにと取り立てて注意していることもないそうである。ただ、ときおり、主に中年の世代の客から、店員のこの言い回しについて、苦情というほどではないにしても、珍しい言い方だねというような趣旨の冗談混じりの指摘がなされることはあるようである。

## II. 考察

以上、第I節でおおまかな言語事実を確認した上で、この「～円からお預かりします」という表現に関して、文法理論の見地から考察を加えてゆくことにしよう。

無論、この表現において問題になる点とは、「から」という語の存在である。日本語の「から」のような語は、伝統文法では助詞と呼ばれるが、言語の普遍性を強く意識した生成文法などの現代文法理論では、西欧語の前置詞に対応するものと考えて、しばしば後置詞 (postposition) という名称が用いられる。

助詞と後置詞とは、日本語文法においてはほぼ同義語と考えてもよいが、それぞれの術語が指し示す範囲は理論的枠組みによって微妙に異なりうる。一般的には、後置詞という名称を用いた場合のほうがやや指し示す語類の範囲が広がる傾向があり、伝統的日本語文法では単一の助詞とみなされ得ないようなものまで含む傾向がある（この点についての具体的事例などは、松本（2002）を参照されたい）。また、本論で私が採用する理論的立場からすると、いわば安心して後置詞と呼べる語類は、最も基本的な格助詞である「が」「を」「に」「の」と係助詞「は」などを除いたその他の語であるという結論にもなりうる（この点についての詳細は、次節における解説および長谷川（1999）・松本（2002）・三原（1994）などを参照されたい）。そこで本論では、以後は基本的にはもっぱら後置詞という用語のほうを好んで用い、ニュアンスに応じて助詞という用語も併用することとする。

そこで、まず最初に考えたいことは、「千円からお預かりします」という表現中の後置詞「から」が本来不自然な表現であることは確かだとして、それではいったい本来ならどのような言い方をするのが自然な表現なのであろうか、ということである。無論、すぐに思いつくのは、「から」を「を」に交換した、(4)のかたちであろう。

(4) 千円をお預かりいたします。

しかしながら、(4)のかたちは、確かに文句なく正しい日本語の表現ではあるが、日常的な会話表現としては、ややぎこちなさが残るように思えないだろうか。日本語の母語話者としての私の直感からすると、少なくとも口語体においては、この場合には何も後置詞をとまなわない(5)のかたちのほうが、自然で普通の言い方のように感じられる。

(5) 千円 ~~を~~ お預かりいたします。

つまり、この表現は、本来(5)のように何の後置詞もとまなわなにかたちこそが、実は最も普通の言い方なのである。先に例文(1)は例文(2)のような表現が短縮・省略された表現であるというような説明をしたが、見方を変えれば(1)は本来(5)のように言うはずの表現のなかに、「から」という後置詞が無理矢理割り込んできてできあがったものであると説明することもできる。

だとしたら、なぜ本来(5)の言い方で充分なところに、無理矢理後置詞を割り込ませねばならないのだろう。その理由は、おそらく表現の丁寧さを高めるために違いなかろう。周知のように、日本語では助詞を省略するということがごく普通におこなわれるが、それはあくまでも比較的気楽な話し言葉においておこなわれることであり、書き言葉や丁寧な話し言葉では助詞の省略はおこなわれないのが普通である。(5)を発話しようとする話し手は、(5)が本来最も自然な日本語の表現であるにもかかわらず、他の構文の場合との類推から、助詞を欠いたこの表現を丁寧さに欠けるぶっきらぼうな表現と感じ、あわてて適当な後置詞を挿入することになってしまうのではないだろうか。

もう一度具体的な使用場面を想定して、話し手の頭脳の中で起こっていると考えられることをなぞってみよう。話し手である店員が、客からなにがしかの料金を受け取り、そのことを客に確認する発話をおこなおうとする。ごく自然な表現として、(5)が頭に浮かぶ。しかし、(5)は助詞を欠いているという点でやや口語的すぎる表現のように感じられ、店員が客に対して発する表現としてはやや丁寧さに欠けるように思える。ならばより正確な表現である(4)を用いようか。しかし(4)はややぎこちない表現のようにも思えるし、やや発音しにくそうな文でもある。あれやこれやと迷っている話し手の脳裏に、「から」という後置詞がよぎる。そこで結局、(1)が発話されることになる、という訳である。

すると、ここに残される問題は、この場合話し手の心に浮かぶ、いわば苦肉の策の後置詞が、なぜ他の後置詞ではなく「から」であるのか、ということである。(1)のような、論理的にきわめて不自然な表現を許すのであれば、たとえば次の(6)や(7)のような表現でも差し支えないのではないか。実際、筆者は「千円でお預かりします」という言い方は耳にした経験がある。

(6) 千円までお預かりします。

(7) 千円にてお預かりします。

無論、ここで「から」という後置詞が選ばれる大きな理由のひとつとして、例文(2)のような表現との類推が働いた、という説明が有力であることは確かであろう。しかしこれが唯一の理由であろうか。私がここで提案したいもうひとつの説明法は、日本語話者にとって「から」という語は最もデフォルト(default)な後置詞なのでないか、というものである。以下に続くふたつの節では、この点について論じることにはしたい。

### Ⅲ. 理論的解説(その1)

前節では私は、「から」は後置詞のなかでも最もデフォルトな語なので、何か後置詞的なものが必要な場合に挿入されやすいのではないか、という説明を提案した。それでは、「から」をデフォルトな後置詞であると断定する根拠としては、どのようなものが考えうるのであろうか。

このことを論じるには、ふたつの方向からの議論が必要である。すなわち、以下に(8)①②として挙げるふたつの論点が必要になるはずである。

- (8) ①より基本的な後置詞であると思える「が」「を」「に」「の」「は」などが、なぜデフォルトにならないのか。
- ②「が」「を」「に」「の」「は」以外の後置詞のなかでは、「から」が本当にデフォルトな存在といえるのか。

実は、上記①②のいずれの論点に関しても、日本語内部の議論からだけでは、あまり説得力のある根拠を見いだすことはできない。これらの点に関して、多少なりとも納得のいく議論をしようと思うならば、生成文法を初めとする理論言語学の考え方を取り入れて、普遍文法的な観点から、日本語の後置詞と、それに相等する西欧語の文法形式とを比較対照して論じる必要がある。

日本語の後置詞に関する生成文法的／普遍文法的観点とは、およそ次のような考え方をさすものとまとめることができる。

- (9) ①日本語の後置詞は、その文法構造上の位置付けにおいて、西欧語の前置詞に匹敵する語類である。
- ②西欧語の前置詞や、日本語の後置詞の最も重要な役割は、文中の動詞に対して各々の名詞句が持つ意味役割 (**θ**-role) を標示することである。
- ③言語が文中の名詞句の意味役割を標示する方法としては、名詞自体の格変化による場合と、前置詞／助詞／後置詞といった独立した語の使用による場合とがある。

ただし(9)②に関しては少し補足が必要かもしれない。生成文法で意味役割 (**θ**-role) という術語を用いる場合には、文中の動詞との関連で名詞句が持つ意味関係のうち、その動詞を用いた構文の成立にとって不可欠なもののみをさすことが普通である。しかしここでは、この術語の意味をもう少しゆるやかに拡張して、動詞に対して文中の名詞句が持つあらゆる種類の意味関係をさすものと定義しておくことにする。

以上の内容を確認した上で、まず(8)①の問題に取りかかることにしよう。生成文法の枠組みによる日本語文法の研究では、助詞／後置詞によってあらわされる日本語の名詞句の格 (Case) を、構造物と内在格に分類して考えることが一般的になっている。私は、日本語の遊離数量詞について論じた松本 (2002) のなかで、長谷川 (1999) や三原 (1994) を参考にしつつ、この分類法について以下に引用したような解説を試みている。

……生成文法の枠組みによる日本語研究では、(中略) ガ格とヲ格とは、構造物 (structural Case) と呼ばれている。一方、その他の格助詞やそれに類する表現であらわされる格は、内在格 (inherent Case) と呼ばれている。構造物は、述語との関連によって多様な意味を帯び、格助詞の省略が比較的容易である。これに対して内在格は、固有の独立した特定の意味を持ち、それをあらわす格助詞等を省略することが困難である。つまり、構造物であるガ格・ヲ格は、その名詞

句に特定の意味を付加するというよりも、むしろ文中においてそれらの名詞句が置かれている、主語あるいは目的語という文法関係を標示するのが主な役割であると考えられている。(中略) 構造格をあらわすガヤヲという語は、もともと派生の初期の段階では存在せず、あくまでも表面的に付加されるものにすぎない、と考えることができる。したがって、格助詞ガヤヲは、文の基本的な構造の点ではいわば無視することができるものであり、ガヤヲをとまなう名詞句は、全体としても単なる名詞句 (NP) であるとみなすことができる。これに対して、内在格をあらわす格助詞は、派生の最初の段階からそこに存在していなければならないものであり、ガヤヲ以外の格助詞をとまなう名詞句は、名詞句に後置詞 (postposition) が加わって、全体としては後置詞句 (PP) を形成しているものと考えられる。 [松本 (2002) pp. 61-2]

上記の引用中では、構造格の例として「が」と「を」のみが取り上げられているが、「の」と少なくとも「に」の用法の一部も、同様に構造格としての性質を持っていると考えられる。「の」に関しては、省略し難い点、数量詞遊離を許しにくい点など、構造格であると断定する規準の多くに反する性質が存在することになるが、文脈次第で多用な解釈を許す点や、西欧語の属格/所有格との対応が明らかな点などから、やはり構造格を表す語であると断定してよいであろう。

だとすると、日本語の「が」「を」「に」「の」といった助詞は、西欧語の前置詞に匹敵するものとしての本来の後置詞であるというよりは、むしろ西欧語の格変化語尾に近いような性質の文法要素であり、日本語における最も典型的な後置詞であるとはみなしがたくなっていく。

また日本語の係助詞「は」は、構造格を標示するものでないが、発話の主題 (topic / theme) を示すための標識として、これもその語自体の意味内容というよりはむしろ文法構造もしくは情報構造上の役割を重視すべき語であり、その点においてやはり典型的な後置詞であるとはとても呼べそうになり語である。

以上のことから、表面上は最も基本的な助詞であるかのように見える「が」「を」「に」「の」「は」などは、いずれも日本語におけるデフォルトな後置詞であるとは呼びがたいということがお分かりいただけたと思う。できるだけ簡単な言葉で言い換えてみるならば、これらの語は、あまりに言語の文法構造に密着した基本的で本質的な語でありすぎて、むしろ典型的な後置詞であるとは言えなくなってしまうのである。

#### IV. 理論的解説 (その2)

では次に (8) ②の疑問に移ろう。「が」「を」「に」「の」「は」がデフォルトな後置詞と呼べないとして、その他のさまざまな後置詞あるいはその相等語句のうちで、なぜ「から」が最も基本的な、デフォルトな後置詞であると言えるのであろうか。これには、以下に述べてゆくような、いささか間接的な根拠がいくつか考えられる。

まず第一に、次の例 (10) からわかるように、後置詞「から」は、さまざまな用例においてしばしば他の後置詞に交換することが可能である。

- (10) a. 東京駅から／を出発する。  
 b. 朝八時から／に作業を始める。  
 c. 先生から／にほめられた。  
 d. 警察が市民から／に事情を聞いた。  
 e. 酒は米から／でつくる。  
 f. 個人的な理由から／で退職する。  
 g. 興奮から／で泣きだした。  
 h. ひよんなことから／でけんかになった。  
 i. 不足分を貯金から／で補う。  
 j. 山から／に日がのぼる。  
 k. さすが天才は顔から／が違うね。  
 l. 先生から／をしてそんなことでは、生徒にしめしがつかない。

これらの例文において、下線部の後置詞「から」をそれぞれその隣にある語に置き換えたとしても、微妙なニュアンスの差は別として、基本的な文の命題内容にそれほどの差はないように感じられる。「まで」「より」「にて」などの他の後置詞類は、このように自由な交換を許すことはあまりなさそうである。このことは、「から」の表す意味が、かなり広く漠然としたものであり、より基本的で単純な形をした「を」「に」「で」などの他の助詞の表す意味に近いものであることを示唆している。特に最初の(10a)の例は、典型的な構造格のひとつであるとされる「を」によって代用が可能な例であることや、この場合の名詞句「東京駅から」の持つ意味役割は、「出発する」という動詞のつくる構文にとって不可欠なものであり、この名詞句は本来の厳密な意味での意味役割をになう名詞句であるとみなすことができる、という点などから、とりわけ注目すべき重要な例であるといえよう。

第二の議論として、日本語のそれぞれの後置詞の直前に、限定を表す語「だけ」または「のみ」を挿入するという文法操作を考えてみよう。

前節で、本来の後置詞というよりはむしろ単なる格標識の一種ともいえると結論づけた「が」「を」「に」「の」と、主題標識の一種と結論づけた「は」の、合計五種の助詞に関しては、それぞれの語の前に「だけ／のみ」を挿入して、「～だけ／のみが」「～だけ／のみを」「～だけ／のみに」「～だけ／のみの」「～だけ／のみは」という表現をつくることができる。

ところがその他の後置詞、たとえば「まで」「より」「にて」などに関しては、同様の挿入をおこなった結果の表現「～だけ／のみまで」「～だけ／のみより」「～だけ／のみにて」は、いずれも日本語の普通の表現としてありえないか、またはかなり不自然な表現であると感じられる。ところで、後置詞「から」に同様の操作を加えてみると「～だけ／のみから」という、まったく自然な表現ができあがる。このことから、「から」は「まで」「より」「にて」などの他の後置詞と比べると、より格標識に近い性質も併せ持っている結論することができる。

これまで例として検討してきた助詞／後置詞のうち、もうひとつ残された後置詞「で」も、「～だ

け／のみで」という言い方が可能なことから、この点に関して「から」に近い文法的位置づけを持っているといえる。このことから、第Ⅱ節の例文(6)(7)との関連で言及した、「千円でお預かりします」という表現が成立する可能性をも、予測することができる。

第三に、他言語における奪格 (ablative case) という格形式の存在ということが挙げられる。格の区別を語形変化によって表現する、いわゆる屈折語タイプの言語の中には、「～から」の意をあらわす奪格と呼ばれる格形式を持つ言語が少なくない。ラテン語やサンスクリット語がその最も有名な例である。日本語の助詞でいえばそれぞれ「が」「の」「に」「を」に対応する主格・属格・与格・対格に加えて、「から」に対応する奪格を持つ言語がごく普通に存在するという事実は、日本語の後置詞「から」によって表される概念が、言語によっては格変化という手段で表現されても不思議はないほどの基本的な概念であるということの意味し、したがって日本語の「から」という後置詞も、内在格を表現する後置詞のなかでは、「が」「の」「に」「を」に最も近い、最も基本的な後置詞であるという結論を支持する現象であると考えうる。

第四番目の議論として、英語におけるデフォルトな前置詞という問題を取り上げてみよう。次の例文(11)～(14)を参照されたい。

- (11) a. I am fond of classical music.  
 b. I like classical music.
- (12) a. I am aware of the danger.  
 b. I realize the danger.
- (13) a. I am afraid of snakes.  
 b. I fear snakes.
- (14) a. the monster's destruction of the city  
 b. The monster destroyed the city.
- (15) a. his refusal of our offer  
 b. He refused our offer.

(11a)(12a)(13a)はそれぞれ形容詞が慣習的にその後前置詞 *of* ではじまる前置詞句をとる例であるが、それぞれの形容詞がbのようにほぼ同じ意味の一語の動詞で置き換えができることなどから考えても、これらの前置詞句は文法構造上、動詞の目的語と同じ位置、すなわちXバー理論でいうところの補部 (complement) の位置をしめているものとされる。また、(14)(15)はもはや古典的なものとなりつつある例文であるが、それぞれのaの名詞句表現が明らかにbの文と内容的に関連があることから、(14a)(15a)における主要部名詞と後続する *of* 句との関係は、動詞とその目的語の関係に匹敵するものであると考えられる。

これら(11)～(15)の例文において、それぞれaの文中に出現している下線部の前置詞 *of* について、近年の生成文法では次のように考えている。上述のように、これらの例文中の *of* 句は動詞の



目的語に相等するものであるが、動詞と異なり形容詞や名詞は後続する目的語の名詞句に格（目的格）を与えることができない。そこで、格を持たない名詞句が文中に残ることを避けるために、目的語にあたるそれぞれの名詞句の前に前置詞を挿入して、目的格（あるいは斜格）を与えられるように調整する。その際、特に語彙的な要請などが無い限り、挿入すべき前置詞として、英語において最もデフォルトな前置詞である *of* が選択される、というわけである。なお、この説明法の中で、「目的語に格を与える」という部分については、最近のいわゆる極小主義理論（Minimalist Program）においてはかなり異なる説明がなされるようになってきてはいるが、*of* をいわば臨時に挿入されるデフォルトな前置詞として扱うという考え方は、現在でも支持する研究者が多い。

ここで注目したいことは、このように英語でデフォルトな存在として扱われる前置詞 *of* が、本来語源的に「～から」の意を持つ語であるということである。英語は他の西欧諸語に比べても際立って語彙の豊富な言語であり、「～から」を意味する前置詞あるいは前置詞相等語句にも、*of*, *from*, *off*, *out of*, *since* 等々、さまざまな表現が存在するため、*of* が本来「から」を意味する語であるということは日頃忘れられがちであるが、例えば次の(16)の各例にみるような用例は、明らかに *of* の持つ「～から」の意が強く反映されたものといえる。

- (16) a. He robbed me of my money.  
 b. He was cured of a disease.  
 c. He is a man of / from Oregon.  
 d. He comes of / from a good family.  
 e. I asked a question of her.  
 f. You expect too much of / from her.  
 g. He died of cancer.  
 h. This house is made of bricks.

このように、英語において本来は「から」の意を持つ語がデフォルトな前置詞として利用されているという事実は、日本語においても「から」がデフォルトな後置詞として利用される傾向があると言ってよいのでないか、という結論を強く示唆するものであると考えることができる。

以上、いずれも直接的な証拠とは呼びがたいが、日本語の後置詞「から」がデフォルトな地位を持った語であるという結論に我々を誘導する議論を四点検討した。これまで第Ⅲ節と第Ⅳ節とで論じてきたことを総合すると、日本語の後置詞「から」は、「が」「の」「に」「を」「は」のような単なる格標識とは異なるが、他の後置詞に比べるとよりデフォルトな性質を持った語であると結論づけられることになり、「から」が日本語の典型的な後置詞としては最もデフォルトな存在であるという結論が導かれることになる。

## V. 結論

以上、本論で述べてきたことを要約するなら、次のようになろう。現代の口語日本語で頻繁に用いられるようになってきた「～円からお預かりします」という表現を理論言語学的に解説してみるならば、本来助詞が存在しなくてよい部分に、丁寧表現の一種として助詞の挿入が必要であると感じられるようになった結果、もっぱら格標識として用いられる助詞以外の後置詞として最もデフォルトな存在であると考えられる語「から」が挿入されることになった、と説明することができる。

もとより、本論で提案した分析は、十分な根拠と豊富な言語データに裏付けられているとはいいがたく、今後のますますの検討を必要とするものである。また、これまでも述べてきたように、本考察がこの言語現象に対する社会言語学的もしくは心理言語学的観点からの研究の意義を軽視するものではない事を重ねて強調しておきたい。しかし、生成文法を初めとする理論的文法研究がかなりの発展を遂げ、究極の目標であった普遍文法の構築というもくろみが相当に具体化しつつある現状において、今回取り上げたような口語表現の誕生と流布を、理論言語学的観点から分析してみるということも、決して価値のない試みではないと信ずる次第である。

### 引用参考文献

- 長谷川信子（1999）『生成日本語学入門』 東京：大修館書店。  
松本純一（2002）「日本語の遊離数量詞構文を通して見た生成文法小史」『東洋女子短期大学紀要』 第34号 pp. 57-72.  
三原健一（1994）『日本語の統語構造——生成文法理論とその応用——』 東京：松柏社。